國學院大學学術情報リポジトリ

発題4私学教職大学院における高度専門職養成と教師教育者の課題(平成二十五年度國學院大學人間開発学会第五回大会公開講演会・シンポジウム：私学教員養成系学部における「質保証」システムをどう構築するか)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中田, 正弘 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001260

発題④

私学教職大学院における高度専門職養成と教師教育者の課題

中田　正弘

【キーワード】
教育実習、教師教育者、教職大学院、ＦＤ

1．問題の所在

人学校における教育諸問題が複雑化・多様化する中、教員の質の向上を目的とした改革が教育職員養成審議会の答申等で指摘され、教員養成段階においても実践的指導力の育成をめざし、理論と実践の往還を実質化するカリキュラムや、省察的で研究志向的な実習経験の必要性が認識されてきた。また、中央教育審議会答申（二〇〇六）を受け、二〇〇八年には理論と実践の往還による教員養成改革構想として、教職大学院が創設された。

こうした教員養成にかかる改革動向に対して、教育実習生が、実践的指導力を鍛える場となる学校現場での指導体制や大学の実習指導教員の資質能力に関する議論は極めて乏しい。教職大学院においては「実務家教員」が、学校教育に関する理論と実践との往還を図る有力な存在として期待され、専任教員のうちの四割以上を目安として置かれている。その要件は、先の答申においては。「教員等学校教育関係者については、指導主事や校長等管理職経験も含め、教員として一定の勤務経験を有することにより、優れた教育実践経験を有する者であることが必要である。（中略）例えば教科研究会等における実践的・実証的研究成果の発表記録や著作等から、担当する専門分野に関する高度の教育上の指導能力を有するものと認められる者とすることが必要である。」と示されている。つまり、ここで求められる能力は、教員としての経験とすぐれた実践力・指導能力である。こうした能力は、理論と実践の往還をめざした教員養成を志向するうえで、また教育実習などの臨床的な場面で、ポジティブな方向に発揮されることは比較的イメージしやすいものの、研究者教員との協働も含め、具体的な場面において期待される資質能力や役割に対する議論・検討は、決して多いとは言い難い。とりわけ、実践的指導力を鍛える場である教育実習の指導に対し、教員としての経験や優れた実践力・指導力が、教員養成を担う指導者としての能力と一致するのだろうか、という問題意識は、実務家教員である自身にも向けられる。

本稿は、オランダやアメリカにおける教師教育者養成にかかる動向を踏まえつつ、実習指導担当教員ＦＤの試行について報告するものである。

2．オランダVELON・アメリカATEにおける教師教育者養成の動向とスタンダード

ここでは、オランダやアメリカにおける教師教育者養成について、二〇一一～二〇一三年における聞き取り調査をもとに報告するが、教師教育者という用語については、一定の定義を見出すことが難しい。VELON（教師教育者協会）では、組織が範疇とする教師教育者は、大学やPABO（初等教員養成機関）などで教員養成にかかわる教員だけでなく、小中学校や高等学校において実習指導に当たる教員なども含まれている。またアメリカでも、「教師教育者とはどんな人物を指すのか」に関しては議論が絶えない状況にある。ATE（教師教育者協会）では、①高等教育機関の教員で、NCATEが明示する教職専門教育（professional studies）（臨床的経験も含む）における授業科目を教授し、また、その分野の研究を遂行する者、②学校の教員で、養成段階の学生の臨床経験に対する指導助言や監督を行う者、③学校の教員で、現職教員の専門的成長を促すための教授活動を企画・遂行する者、④高等教育機関や学校以外の職員で教員のための専門職教育を企画し、実施し、評価する者を教師教育者として定義づけている。

さて、オランダのVELONは、教育にかかわるすべての人々をサポートすることを前提に、とりわけ教師教育者の質及び専門性の向上をサポートすることを目的とした組織である。

教師教育者自身の専門性の基準は、大学等における教師教育者の場合は七つ、小中高等学校の教師教育者の場合は八つの領域で構成される。小中高等学校の教師教育者のスタンダードを例に挙げれば、八つの領域に対して、具体的な項目が四十示されている。そしてこのリストはVELONに登録を希望する教員自身の教師教育者としての専門性を把握するためのものとしての活用が期待されている。

①教師教育者としての基本的な考え方（四項目）
②対人関係と教育（八項目）
③指導方法（八項目）
④組織（三項目）
⑤同僚との協働（四項目）
⑥学校の方針や発展に対する取り組み（六項目）
⑦多様な状況の中での職務（三項目）
⑧教師教育者自身の専門性を高める努力（四項目）

これら八つの領域には、例えば「2-5 教育実習生が学び得た事柄を使いながら、彼らの自発性を伸ばせる」「2-7 教育実習生が抱える職業観やアイデンティティの発達をサポートできる。」「2-8 教育実習生の価値の方向付けや、自分自身の価値を自覚するように促せる。」「3-5 教育実習生の様々な経験を理論的な観点からも掘り下げ、さらにその経験を実用的な職務上の理論に置き換えるよう促す。」など四十項目が示されており、それは教師として経験や実践力を有するのみならず、実習生の経験を価値づけたり、省察させたりできる能力が含まれている点に特徴がある。

一方ATEにおけるスタンダードは次の九つの領域で作成されている。

①教授（Teaching）
②文化的能力（Cultural Competence）

③学問（Scholarship）
④職能開発（Professional Development）
⑤プログラム開発（Program Development）
⑥協働（Collaboration）
⑦公的な政策提言（Public Advocacy）
⑧教師教育の専門家（Teacher Education Profession）
⑨理想像（Vision）

このスタンダードからは、広い学識の下に自ら実践を省察し、新しい教授やプログラムを作りだす者として教師教育者の姿が示されている。また、評価への活用や、大学院での指導などを通した教師教育者の養成という側面で活用することを提唱されている点も特徴の一つとなっている。

3．帝京大学教職大学院のカリキュラムと実習科目の位置付け

本研究科は、理論と実践の融合をめざし、三つの科目群によりカリキュラムを編成している（**図1**）。また、的確な理論的究明能力と高い専門性、柔軟な実践力を有する教師の育成をめざすという観点から、多くの授業科目を研究者教員と実務家教員のペアで指導にあたっている。さらに、学生の様々な関心や課題に応えられるように六十一に及ぶ授業科目を設定するほか、医学部を有する総合大学の利点を生かした科目を設定していることも特色の一つとなっている。

とりわけ実習科目は、理論と実践の融合の要ともいえる科目群であり、教職大学院のカリキュラムでは、質・量ともに高い

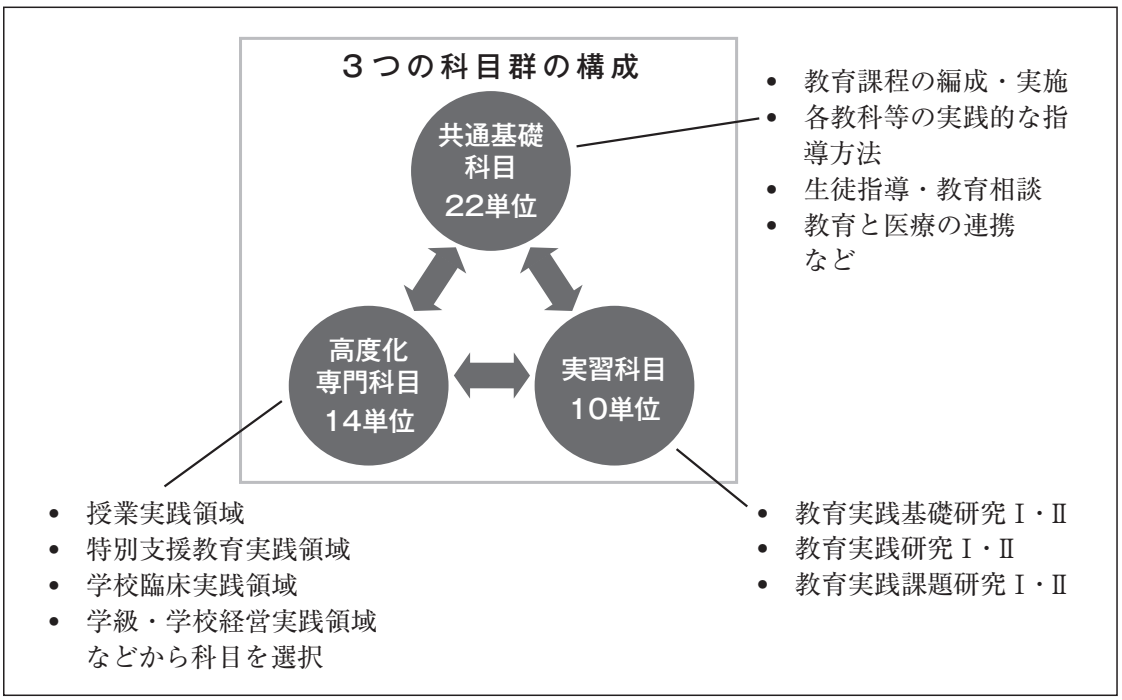

図1　３つの科目群によるカリキュラムの構成

ウェイトを占めていると言ってよい。本研究科における実習科目群は、基礎的研究能力の獲得を目指した「教育実践基礎研究Ⅰ・Ⅱ」、授業実践力や校務運営にかかる能力の育成を目指した「教育実践研究Ⅰ・Ⅱ」、さらには、学校における教育課題を実践的に探究する研究能力の育成を目指した「教育践課題研究Ⅰ・Ⅱ」という6つの科目で構成されている。

理論と実践を融合させ、「高い専門性と実践力を有する教師を育成する」ことを目指す教職大学院にあっては、この教育実習における指導が極めて重要になってくるのである。

4．実習指導担当教員の省察的能力向上をFDプログラムの検討と試行

（1）学生からみた実習指導担当教員の役割期待

教育実習指導担当教員のFDプログラムを検討するに当たり、まず、学生に対しては「大学院の実習担当教員から受けた指導で効果的だった指導内容は何か」、教員に対しては、「自分が学生の実習に対して行った指導のうち、効果的だったと考える指導内容は何か」（専任教員を中心とした十二名）というアンケート調査を行った（平成二十五年二月）。

学生から出された項目は百二十六となり、そこから、四つの大項目、十三の小項目に分類・整理した。同様に教員からの回答も分類・整理した。

〈アンケート結果の分類〉

大項目（1）学習指導・生徒指導に対する指導助言

① 実習日誌を通じて具体的なアドバイスや方向性を示すことができる

② 学生の授業に対し、記録・分析をもとに、具体的なアドバイスができる

③ 学習指導や生徒指導における具体的な指導技術についてアドバイスができる

④ 学生が実践する授業の計画について、具体的にアドバイスができる

⑤ 教科特性に応じた基本的な考え方や指導観についてアドバイスができる

大項目（2）学生の研究に対する指導助言

⑥ 学生の課題研究に対し、資料や研究方法、進め方について、高い専門性からアドバイスできる

⑦ 学生に対し、新たな情報や学習機会を提供することができる

大項目（3）学習や生活、進路に関する指導助言

⑧ 学生の大学院での生活を具体的にとらえ、アドバイスや支援ができる

⑨ 学生の成長を具体的にとらえ、フィードバックできる

⑩ 学生の希望を踏まえ、今後の進路についてアドバイスができる

⑪ 学生の大学院での取り組み状況を具体的にとらえ、フィードバックできる

⑫ 自身の経験や教育観等を学生に示すことができる

大項目（4）実習校との調整

⑬　実習が適切に実施できるように実習校との連絡調整ができる

分類・整理の結果、大項目（1）、（2）、（4）は、学生・教員ともに、相対的に高い数値を示す結果となった。つまり、実習校で、授業を観察したのちに、指導方法や児童生徒理解などについて具体的に指導したり、学生の研究内容に的確に指導助言したり、さらには実習校と実習の進め方について調整したりする能力である。

一方、大項目（3）については、学生はかなり高い回答数となったが、この項目にかかる内容を効果的と回答した教員はごくわずかだった。このことについては、幾通りかの解釈が可能であるが、学生としては、自身の実践や学修を振り返り、的確な方向性を見出せるような省察的な指導助言を強く求めているということが明らかになった。

（2）FDプログラムの検討

FDプログラムの検討にあたっては、先のVELONの教師教育者スタンダードや学生のアンケート結果などを踏まえるとともに、教員が実習指導において困難に感じている部分をピックアップし、構成することとした。

その結果次の4点が中心的な検討内容となった。

・実習指導担当教員として省察にかかる能力を高めること
・学生の実習指導担当教員に対する役割期待を理解すること
・授業研究・授業記録を軸とした実習指導の方法を獲得すること
・研究科における実習の特色や方法等について理解すること

また、FDは、実習開始前に計画し、研究者教員・実務家教員を問わず，実習指導担当教員全員参加の下に実施することとした。

〈教育実習指導担当教員FDプログラム〉

【目的】

理論と実践を往還し、高い専門性と優れた実践力をそなえた教員を養成するため、きわめて重要な授業科目である教育実習の指導の充実を図るため、以下のようにFDを実施する。

【プログラム】

第一回　四月五日（金）五限

①　教職研究科における実習科目の仕組み　二十分（中田）

②　実習担当者の役割

○実習指導担当者の総括的役割とマネジメント（実習校との調整）二十分（I）

○実習担当者に期待される資質能力（アンケート調査結果から）二十分（中田）

・学生の期待はどこにあるか
・実習指導担当者（＝教師教育者）として期待される資質能力

○学生の実習に対するコーディネート　三十分（S）

・実習に対する具体的な目標設定と指導内容の理解
・実習日誌を通じた指導のポイント

※各自前年度の実習日誌一部を二十部コピーして持参

第二回　四月十日（水）　五限

①　学生自身に省察的に自己とらえさせるためのワークショップ　四十分（中田）　**図２**

②　実習初期に行われる道徳の授業づくりに関する指導助言のポイント　三十分（S）

③　授業実践の事前・事後の指導の実施計画十分（S）

④　実習生として特別な支援が必要な児童生徒への関わり方のポイント　二十分（T）

第三回　四月十七日（水）　五限

①　実習生の授業の見方と指導助言のポイント　五十五分（M）

※この日は午前中に帝京大学小学校で授業観察をする。そこで各実習担当者は、**目前の学生に見せながら指導することを意識し「自分なりの授業記録」をとり、五限にA３用紙一枚にまとめ、二十部印刷して持参。**

②　メンターとしての役割と学内における連携体制　二十分（K／N）

③　実習FDリフレクション十五分（中田）

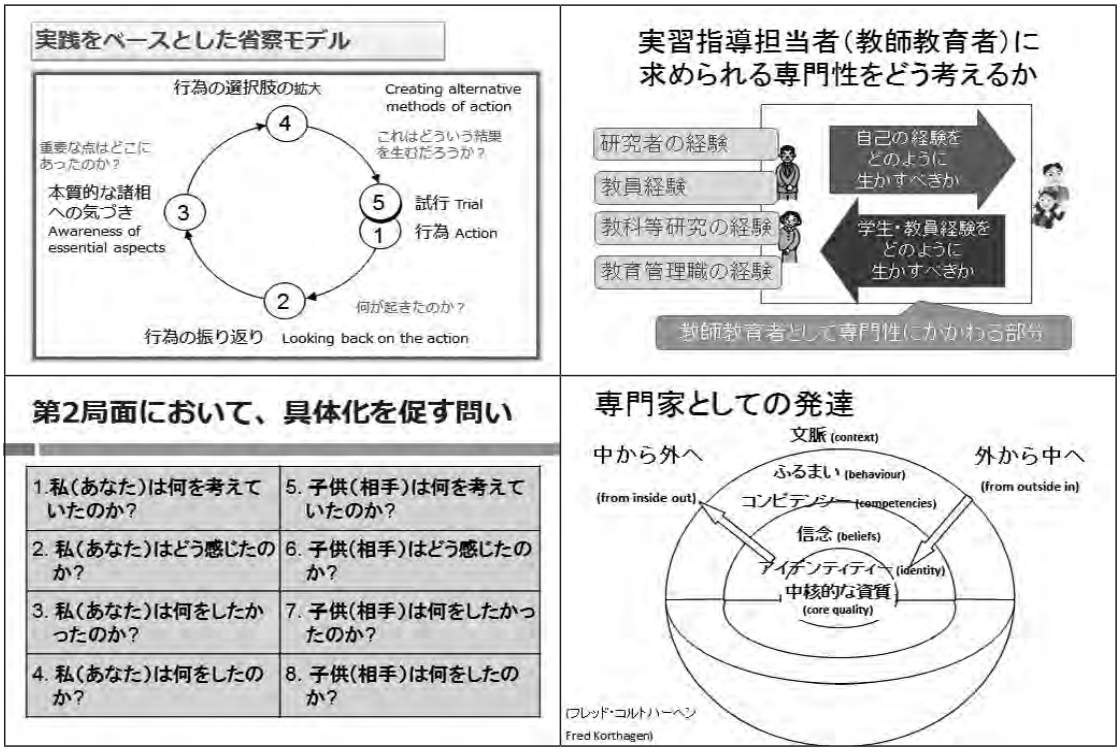

図２　省察に関するワークショップで用いたプレゼンシート（４月５日実施）

4．まとめにかえて

教育実習開始前に、3回にわたって実習指導担当教員ＦＤを実施した。実施後によせられた教員の感想は、実習の仕組みが理解できたこと、誰もがもっている実習指導の悩みを共通の場で話せたこと、さらには、学生のニーズを知ることができたことが有効であったという内容が大半であった。しかし、実習指導担当教員として、その役割や必要な資質能力を共通に考えることはできたものの、今回の取り組みだけで、具体的にどのような成果が上がったかということは判断することができない。

理論と実践の融合を図り、高い専門性と実践力を育成しようとする教職大学院にあっては、実習指導担当教員の力量は、きわめて重要なファクターとなる。

今後は、国内外の教師教育者にかかる研究・実践の動向を視野に入れつつ、教職大学院における教員養成の質保証について、さらに実証的な研究を進めていきたいと考えている。

参考文献等

・中央教育審議会「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」（二〇〇六）
・中田正弘・伏木久始・坂田哲人・鞍馬裕美「教師教育者の位置づけと役割～オランダ・デンマーク・アメリカとの比較を通じて～」（二〇一二）日本教師教育学会発表資料
・中田正弘・鞍馬裕美・坂田哲人・伏木久始「教育実習の質保証をめぐる今日的課題～『教師教育者』という視点から」（二〇一二）帝京大学教職大学院年報第三号
・VELONホームページ
http://www.velon.nl/over_de_velon
・Association of Teacher Educators ホームページ
http://www.ate1.org/pubs/home.cfm

・本研究科では、「理論と実践の融合」という表現に基づいているため、本研究科にかかる記述ではその用語を用いた。

（なかたまさひろ　帝京大学大学院教職研究科教授）